

芯の種類による着用前後の比較

九州女大家政 ○藤弘洋子 文化女大家政 成瀬信子

目的 第1報では各種の芯地を用いて縫製したウールジャージのスーツ9体(右半身)について衿としての芯地による違いを、視覚のみによる場合と触覚を加味した場合について官能検査による比較を行い、好ましい芯地について検討を行なった。

今回は同一試料を着用とドライクリーニング処理を行なった後のスーツを試料とし、前回同様官能検査によって検討した。

方法 スーツを50時間着用後ドライクリーニング1回、更に50時間着用後ドライクリーニングを行なって試料とした。第1報と同一被検査者によって視覚のみによる場合は一対比較法により、触覚を加味した場合は順位法により官能検査を行なった。

結果 1)視覚判定においては処理後についても、布味のそこなわれ方、衿のおさまり具合、見た目の硬さ、全体の適当さのいずれについても危険率1%で有意差がみとめられた。処理後の方が全体の適当さにおいてやや処理前の比較よりも差が大きくみられた。(しかし、処理前後の衿としての全体の適当さの判定は、かなり異なる傾向に判定されている。

2)触覚を加味した場合は、処理後の全体の適当さの順位は処理前の順位とあまり変化していない。

3)視覚のみの場合、処理後もハ刺しよりも接着芯地が適当であると判定されているが、触覚を加味した場合は常にハ刺しがかなり上位に来ている。